

# 新旧「同志」の相克と対話

許維賢著

從艷史到性史

同志書寫與近現代中國的男性建構



A5判 352頁  
 国立中央大学出版中心  
 [本体 3,780円 + 税]

## 三須 祐介

最近、ついに、いややつとというべきか、日本においても、「LGBT」という言葉に象徴されるように、セクシュアル・マイノリティの存在や権利などを意識する機会が多くなってきた。「LGBT」という言葉遣いから、同性パートナーシップ条例まで、そこに様々な議論があることはひとまず措くとして、マイノリティへの差別や偏見を解消し、その存在を可視化することへの期待と効果は計り知れないものがある。

こと文学の面に目を転じれば、台湾を中心とした中国語圏では、「同志文学」というジャンルが存在し、とりわけ台湾の戒厳令解除以降の民主化の進展と並行する形で、九〇年代以降に多くの名作が生まれている。九〇年頃から「同志」には新たに、セクシュアル・マイノリティを表す意味が付与されたのである。中国語圏における「同志文学」研究

は台湾の学術界が牽引してきた側面があり、それは、陳芳明『台湾新文学史(上・下)』(聯経、二〇一一年)邦訳は東方書店、二〇一五の一節が同志文学についての記述に割かれたこと、作家としても知られる紀大偉の専著『同志文学史 台湾的発明』(聯経、二〇一七)が上梓されたことなど、ここ数年の状況からも窺い知ることができる。日本でも黄英哲・白水紀子・垂水千恵編『台湾セクシュアル・マイノリティ文学シリーズ』(全四冊、作品社、二〇〇八―二〇〇九)が刊行されたことは記憶に新しい。

本書は、そのような台湾で出版されてはいるが、著者はマレーシア生まれの華人であり、北京大学中文系に学び博士号を取得、現在はシンガポールの南洋理工大学で教鞭を執っている。映画研究にも取り組んでおり、「マラヤフィル

ムユニットの反共映像と冷戦イデオロギー」(『野草』九七号、二〇一六、及川茜訳) などがある。また、翁弦尉の筆名で小説集『游走与沈溺』や詩集も出しており、日本語訳には「島人」(『東南アジア文学』一五号、二〇一七、及川茜訳) がある。

本書の眼目は、台湾を中心とした「同志」・「同志文学」研究にも目配りしながら、家父長制に基づいた中国近現代における男性性の構築が、「同志書写」やジェンダー・ポリティクスをどのように支配してきたのかを分析する点にある。「同志書写」とは、文学だけではなく、同性愛をめぐる知識人の言説や日記なども視野に入れて、社会との関係性へと広げていく意図が読み取れる。

本書の構成は以下の通りである。

### 導論

第一章 従越界之恋到男性建構…以王韜的艷史為個案

第二章 従《性史》到《新文化》…張競生的「社会性」

論述和一九二〇年代的同性恋叙述

第三章 同志的罔両性、友愛的修辭学…現代中国的男同志書写

志書写

第四章 従「同性恋愛」到「走向革命」(我的童年)与

郭沫若日後的「自我改造」

第五章 四面楚歌下的同志再現…李碧華和陳凱歌对梅蘭

芳《霸王别姬》的改写

第六章 北京之夜的哥兒們…従《品花宝鑑》到《北京故

事》的断袖羅曼史

余論

まず、導論である。前近代において、男色の風は「艷史」として、家父長制を損なわない範囲で存在していたが、近代に至って徐々に病理化され、「性史」のなかに「変態的な性」として組み込まれていく。それはやがて文学などのテクストのなかで不可視化され、薄影(罔両。影のまわりにできる薄い影)のような存在となってしまう。当初は政治的な含意があった「同志」の結びつきがナショナリズムやそれが要請する男性性の構築を促し、社会主義革命、新中国建設へと繋がっていった。これらを「老同志」とし、九〇年代以降のセクシユアル・マイノリティという新たな意味が付与された「新同志」との関係性が、この後の議論の重要なキーワードとして機能する。

第一章は、王韜のテクストを手掛かりに、清末の伝統的な叙事がどのように女色と男色を表現していたのかを分析

している。王韜は妓女と男伶を均しく愛し艶情を捧げているが、興味深いのは西洋漫遊を材にとった小説である。そこには、自らを擬していると思える中国人男性と自立した「西方美人」との邂逅を描き、西洋的近代における対等な男女関係への意識を見出せる。一方、欧州で婦人と間違えられた王韜は憤慨し、西洋から学ぶこと（男らしさの構築も含む）で西洋に抵抗するという民族主義に目覚めていく。王韜は、女色と男色の間を揺れ動く前近代的な文人である一方で、西洋に憧れつつ屈辱を覚える近代知識人という過渡期的な存在であった。

第二章は、一九二〇年代の張競生をめぐる考察である。彼の「性育」「美育」は「男らしい男」「女らしい女」という規範を通じて中国人の身体を健全化することを目的とし、その性研究は（同性愛者を含む）性的倒錯者を「治療」するためだったという。また同性愛を病理化しない中立的な西欧の言説の翻訳もなされたが、張に影響を与えるものではなく、むしろ彼は同性愛を変態視するエリスの視点を強化していく。「真の国民党」を自任し性科学だけでなく政治にも熱意を抱き続けた張の性教育は個人を解放するものではなく、「強種救国」と民族国家の解放を目指すものであった。第三章は、中国における同性愛が「友愛」という概念

のもとで如何に薄影のように不可視化されてきたのかを、一九二〇年代の郁達夫、葉鼎洛と二〇世紀末の王小波、崔子恩のテクストを基に読解している。創造社の二人の作品は、同性愛が病理化されていた当時において「自己治療」するためのものであり、西欧の同性愛病理化言説は五四文化人の精神に暗い影を落としていた。王小波の作品には、施虐―被虐という男性同士の権力関係のなかに、同性愛者という自己認識が介在せずとも、ホモエロティックな感情や欲望を見い出せる。映画にもなった王小波の「東宮・西宮」も小説や自主制作映画で活動する崔子恩も、中国ではほとんど無視され続けている事実は、同性愛がいまだに薄影の存在でしかないことを表しているのかもしれない。

第四章は、郭沫若の自叙伝「我的童年」の複数の版本を比較し、郭の人生と同性愛の関係について分析している。郭は後の自己改造に伴って過去の作品を大量に修正したが、自叙伝の同性愛の記述は全く削除していない。しかし身をもって前近代と近代を生きた郭にとって、同性愛を全く問題視していなかったわけではなく、その記憶は国家の存亡や革命の挫折の徴候であった。新中国建国後に副総理の任に就いてからも、血腥く暴力的な政治運動に手を染めながらも、青年・陳明遠との文通・交流を続けた。旧詩詞で

表現されたその情感は「艷史」の伝統への挽歌だったに違いない。

第五章は、梅蘭芳の京劇『霸王別姫』が李碧華の小説と陳凱歌の映画にどのように書き直され、そこに「同志」がどのように再現されたかを論じたものである。梅蘭芳の『霸王別姫』と小説・映画創作は間テクスト性の関係にあり、国粹として再編された京劇、なかでもナシヨナル・アレグリーとしての『霸王別姫』は毛沢東時代まで利用された。また、男性の物語を標榜した監督と女性や女性性にこだわる李碧華の方向性の狭間で、女形を演じた張国榮の揺れ動く心情にも言及した。実際にその後カミングアウトした張国榮と蝶衣の時空間の異なる自死は、可視化されたとともに消失する「薄影」としての同志主体を象徴している。

第六章は、中国「艷史」の系譜に連なる清代の『品花宝鑑』と九〇年代のネット小説『北京故事』（後に『藍宇』として映画化）を比較している。二つの作品は一〇〇年ほどの隔たりはあるが同じ北京を舞台にしており、士大夫―優伶、高級幹部子弟―貧しい大学生という権力（主従）関係も相似している。『品花宝鑑』は「艷史」の伝統に則り男性同士の恋愛関係を「情」と「欲」の二つに分け、「情」に留まることこそが美德であるとするが、『北京故事』は、「情」と「欲」が矛盾なく表現され、登場人物の肉体関係も描かれている。

男性性の観点からみると、『品花宝鑑』の優伶は女性的な氣質で描かれており、『北京故事』は（特に映画版では明らかに）、男らしいイメージとして顕現している。

余論は、まず中国における「同志書写」が、友愛の下の「薄

□ 新刊 □

## 退職老人の日本語教育

—日中協同教育 in 天津—

東晋次 著

異国情緒あふれる天津の街に惹かれた著者八年に及ぶ単身生活。老人と呼び親しまれ、学生や市民との交流を楽しみ、中国語の世界に浸る日々を生き活きと綴る。日本語授業の実際や独自の指導方法を提示し、学生の日常行動の観察から中国人の心のあり様をさぐる。中国人・中国文化そのものを理解したいという熱意に貫かれた冊。大都市天津ガイドとしても楽しめる。

ライブラリー判並製 ■ 833円

□ 近刊 □

## 北京の合歓の花

—私と中国・中国語—

高橋俊隆 著

中国への留学がかなわなかった時代に中国語学習に没頭した学生時代。日中貿易専門商社に就職、初めての北京駐在中に心魅えられた合歓の花。四十余年、五〇回に及ぶ訪中歴の中で、商社マンの目に映った中国と自らの中国語学習の軌跡を綴る。

B6判上製 ■ 1800円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

「影」や、金銭を媒介とした性的（あるいは情的）関係、女性の介在を特徴として表象されることを指摘したうえで、中国大陸における「同志書写」の現在の方向性を、蘇童、余華、北村、崔子恩などを例に述べる。注目すべきは「下層（底層）書写」としても論じられる若い農民工を描いた劉慶邦の小説「俺たちは死ねない（咱俩不能死）」である。「新同志」の「同志書写」は男女間のセクシュアリティ（あるいは社会的性）の言説を補完し、またその「非生産性（非増殖性）」は、「生産性（増殖性）」に主導された現代中国的な消費社会に対する大いなるアンチテーゼである。ひいては、中国のジェンダー・ポリティクスや同志書写を抑圧し支配してきた「老同志」の男性性を脱構築し、個人の生活を民主化することが重要である。

以上、内容を簡単に辿ってみたが、フーコー、バトラー、セジュウィックなど西欧の理論も縦横に駆使し、緻密な論理展開がなされており、内容は非常に充実しているため、意を尽くしたとは言い難い。力不足をお詫び申し上げます。以下、感想めいたいくつかの点を述べておきたい。

本書の特徴の一つは、文学研究の範囲にとどまらず、社会言説や日記、書簡、映画といったさまざまなテキスト（「書写（writing）」というよりは、エクリチュールというべきか）を材

料に、近代中国における同性愛の状況を丹念に描いているという点である。この手法は、ジャンルではなくフィードという視点から書かれた前掲の紀大偉『同志文学史』にも通じる手法である（ただし台湾に限定された叙述）。

二点目は、「同志」はもはやセクシュアル・マイノリティ全体を指す言葉として機能しているが、著者はほぼ男性同性愛に焦点を絞って論じていることも特徴的である。しかも男性性の構築を「同志」と対照的に置くことで、「現代中国性」を支えてきた男性性が実際には脆弱さも孕んでいることを示すことに成功している。しかし、後述するように、セクシュアル・マイノリティの社会的存在にまで議論を広げていく場合、男性同性愛の視点だけではやや問題があるように思われる。なお、女性同性愛については、中国文学（及び台湾）における女性同性愛の欲望を論じた桑梓蘭『浮現中の女性同性恋——現代中国的女性愛欲』（国立台湾大学出版社、二〇一四・英語版は二〇〇三）が既に出版されている。

三点目は、「同志文学」にせよ「同志書写」にせよ、新しい意味が付与された「同志」（本書では「新同志」）を、その語彙と概念が生まれた時よりも前のテキストに用いることには少なからぬ違和感を覚える。しかし、著者は、元来の「同志」、近現代を通じて政治的な意味を持ち続けたこの言葉を

「老同志」とし、西欧近代的な「男性性」を構築し、その後の性政治を支配しつづけた重要な概念として再配置した。これに莊子を参照した台湾のクイア理論でもある「罔両（薄影）」概念を合わせることで、「老同志」の友愛関係のなかに隠された「同志」の欲望を見出し、「新同志」との接続が可能になったといえよう。これは、セジウィックらのクイア・リーディングを彷彿とさせるスリリングな読解であるが、あくまでも中国的な文脈のなかでの思考を試みている点是非常に興味深い。

四点目は、中国における「同志」研究の行方である。「同志」には元來政治的含意があり、セクシユアル・マイノリティは「いま・ここ」にある生身の人間の問題として存在している。奇しくも著者が余論において、「個人生活の民主化」という問題を提起しているように、同志書写の研究を社会問題（あるいは生存の問題）へと開いていこうとする切実さが感じられるのだ。その切実さは、本書で挙げられた同志書写の中国における軽視や、論じられたとしても程度の差こそあれ病理化された「性史」の論理（ひいてはそれと結びついたホモフォビア）で処理されてしまうことと対照的に映る。とはいえ、二〇一三年には一〇〇名余りの同志の親が全国人民代表大会に、同性婚の権利を求める書簡を送ったことなどを例に、

著者は、同志だけではなくその周囲にいる代理主体（agency）と連帯する可能性と希望も述べている。それは、政治的なイデオロギーの抑圧ではないにせよ、内面化したホモフォビアが払拭されているとは到底言い難い、日本の問題にも繋がっている。

ところで紀大偉は、「同志」文学をめぐる中国と台湾の差異や断絶に注目し、本書が「台湾」を参照しつつ「中国」のみを分析対象としていることを批判的にとらえている（「断裂と連続・評許維賢的《從艷史到性史》」『女学学誌・婦女と性別研究』三七期、二〇一五）。紀の批判はもつともであるが、セクシユアル・マイノリティという国家や民族を超越した問題をより普遍的な文脈でとらえようとするひとつの試みとして、本書の意義は決して小さくはない。むしろ、このような普遍的な文脈のなかでこそ台湾の「同志文学」研究はより力強いものになっていくのではないだろうか。

最後に、一点のみ気になることを付け加えておく。本文中に注記される参考文献の情報が初版の刊行年になっていないものが多く、読んでいて時間的な錯覚を感じた。この処理は工夫の余地があるだろう。

（みす・ゆうすけ 立命館大学）